

教 育 研 究 業 績 書		
2019年5月1日		
氏名 八木 典子 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
応用健康科学、実験動物学、衛生学・公衆衛生学	加齢・老化、栄養指導、環境保健、スポーツ栄養、実験栄養	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
(1) 双方向授業の実践	平成 9年 4月 ～ 平成31年 3月	公衆栄養学実習、食品の安全衛生管理実習 実習のテーマは、各実習グループ共通であつても、実習課題はグループで異なるものを毎回の実習で与える。各実習グループで行った実習について、各グループの実習課題の目的、実習結果、考察をまとめて、報告会を行い相互討論を行う。このことにより、毎回の実習目的と実習に対する評価を学生自ら行なうことができる。また、プレゼンを行い相互評価をすることで、回を追うごとにプレゼンテーション能力の向上と実習目的の把握、考察力の向上が認められる。
(2) 小テストの活用	平成24年	基礎栄養学 基礎栄養学は、学生の苦手とする科目であるが、基礎知識をしっかり身につける必要があるため、毎回の講義で、この講義のテーマと講義内容の重要点を十分説明し、次回の講義の初めに前回の重要点を文章化した小テストを行なった。小テストは評価点に反映されることを明示し、十分に復習することを促した。小テストの後、解答を示し、各自誤った部分の訂正を行なわせた。小テストは14回にわたって行ない、全ての小テストを学習すれば、最低の基礎栄養学の知識は身につくようにした。この方法は、学習ポイントのつかめない学生にとって、学習効率をよくし、知識の修得率は非常に良くなったと評価できる。
2 作成した教科書、教材		
(1) 管理栄養士をめざす人の必携キーワード集 (1版、2版)	平成14年 2月	化学同人 講義終了後から国家試験までに、科目毎の重要点をまとめるとともに、不足している知識を補う目的で作成した。執筆者の専門科目について、重要な用語を概説する形式で、知識の確認と要点チェックができるようになっている。特に重要な言葉は色付けし、色付けされたワードを抜き出しても、繰り返し知識の確認ができる。(362頁) (小川正、大鶴勝、木戸康博編、著者、足立容子、八木典子、他多数) 担当部分：社会・環境と健康 担当科目は25年の教育経験があるということで、健康管理概論、公衆衛生学の科目を指定して依頼を受けて執筆した。国家試験頻出のキーワードについて、要点を概説するとともに、管理栄養士として理解しておくべきデータ等も示し、要点を概説した。(pp.123～149 単著) (国家試験直前学習用)

<p>(2) 公衆栄養学 (1版、2版)</p>	<p>平成14年 4月</p>	<p>同文書院 管理栄養士に必要な公衆栄養学の知識を教科書としてまとめている。教科書の特色としては、公衆栄養行政に関する内容に重点が置かれている。また、食生活、栄養摂取の変遷と公衆栄養行政の関連にも重点が置かれている教科書である。(174頁) (二見大介編、著者、早川史子、芦川修武、梶本雅俊、八木典子、井上浩一、藤沢和恵) 担当部分：第6章 健康日本21と公衆栄養活動 国の健康施策である健康日本21の概要、わが国の健康現状と策定された背景、実践組織と評価の考え方について記述。さらに、この施策と公衆栄養活動の関わり、公衆栄養活動の目指す方向と公衆栄養活動計画のあり方について記述。 (新カリキュラム対応) 公衆栄養学講義に使用 (pp. 90~105 単著)</p>
<p>(3) N7'ックス 公衆衛生学 (初版)</p>	<p>平成14年 4月</p>	<p>建帛社 管理栄養士に必要な公衆衛生学の知識を分かりやすくまとめた教科書である。できるだけ図・表を入れて、要点を分かりやすく示してある。公衆栄養学の基礎となるような知識を基本に構成している。(180頁) (苫米地孝之助編著、著者、稲益健夫、大江武、後藤政幸、堂前嘉代子、中村信也、八木典子) 担当部分：第5章 健康管理 健康管理の考え方とわが国の現状、健康阻害要因と疾病の関わり、総合保険の考え方とわが国の健康づくり計画、健康管理の実践について記述。(pp. 36~47 単著) 8章 学校保健 学校保健の概説、学校保健行政の仕組み、学校保健に関する法規と保健教育・保健管理・学校安全・学校給食等の関連、学童期の健康状態と学校保健の関連等について記述。(pp. 112~120 単著) 12章 医療制度 医療制度の概略、医療計画、医療施設、医療関係職種、医療行政の現状と問題点、医療費の現状と問題点等について記述。(pp. 168~176 単著) 公衆衛生学講義に使用</p>
<p>(4) 社会・環境と健康 公衆衛生学 (改訂版初版、2版、3版)</p>	<p>平成19年 3月</p>	<p>建帛社 N7'ックス 公衆衛生学を新カリキュラム対応に全面書き換え (225頁) (苫米地孝之助編著、著者、稲益健夫、大江武、後藤政幸、堂前嘉代子、中村信也、八木典子) 執筆者会議において、以前執筆した「公衆衛生学概論」(三共出版)の執筆経験から、本の構成や編集に対する希望を提案し、ほぼその提案が採用されたので、教育効果が上がる教科書ができた。担当部分：8章 社会保障制度 社会保障制度の考え方、わが国の健康現状と社会保障制度、医療制度と医療費、高齢者医療費負担、医療計画、福祉・介護制度の概要、社会福祉、介護保険制度、介護保険の実施、介護給付、予防給付、地域支援事業等について記述。 (pp. 138~154 単著) 9章 4 学校保健 学校保健の概説、学校保健行政の仕組み、学校保健に関する法規と保健教育・保健管理・学校安全・学校給食等の関連、学童期の健康状態と学校保健の関連等について記述。(pp. 180~188 単著)</p>

<p>(5) N7ックス 三訂 公衆衛生学 (初版)</p>	<p>平成24年4月</p>	<p>建帛社 社会・環境と健康 公衆衛生学を管理栄養士国家試験新ガイドライン対応に全面書き換え (230頁) (後藤政幸、中村信也編著、著者、石田一紀、石塚里佳、大江武、萩本逸郎、鈴木依子、田口良子、苜米地孝之助、八木典子) 本書は(3)、(4)の教科書の改訂版であり、管理栄養士教育を主眼に管理栄養士国家試験ガイドラインに即した内容で公衆衛生学の知識をまとめてある。 担当部分：7章 保健・医療・福祉・介護の制度 1社会保障の概念、2 保健・医療・福祉における行政のしくみ 3 医療制度 社会保障の定義と概要、公衆衛生と社会保障の関連、行政における保健・医療・福祉、衛生法規の定義とその内容、法規の実践における国、都道府県、市町村の役割、医療保険制度の概要、医療施設・医療従事者の現状、医療費、医療法等について記述。(pp.137~145 単著) 7章 10 学校保健 学校保健の概説、学校保健行政の仕組み、学校保健従事者、栄養教諭の役割、児童・生徒の健康状態、学校保健統計の概説、学校保健安全法等について記述 (pp.200~209 単著)</p>
<p>(6) 公衆栄養学(第1版、第2版、第3版)</p>	<p>平成14年 4月</p>	<p>南江堂 国立健康・栄養研究所監修シリーズの管理栄養士教育のための公衆栄養学の教科書である。管理栄養士国家試験ガイドラインに準拠し、管理栄養士が公衆栄養学の知識として理解すべき内容を記述している。内容的には一定の高度な内容量を含んでいるので、教育担当者が参考にして教育するような使用も可能である。(379頁) (田中平三、徳留信寛、伊達ちぐさ、佐々木敏編著、著者村山伸子、吉川賢太郎、八木典子、他多数) 担当部分：第4章A高齢社会と健康・栄養問題 健康寿命の定義と健康の考え方、要介護者数と介護状態、老年期認知症の問題、高齢者と健康、生活習慣病予防と高齢者の健康対策、高齢者に対する栄養管理のあり方等について記述。 公衆栄養学講義に使用 (pp.141~146 単著)</p>
<p>(7) 公衆栄養学(改訂第4版)</p>	<p>平成25年 3月</p>	<p>南江堂 国立健康・栄養研究所監修シリーズの管理栄養士教育のための公衆栄養学の教科書である。(6)の教科書を管理栄養士国家試験ガイドラインの改訂に伴い改訂したもの。管理栄養士国家試験ガイドラインに準拠し、管理栄養士が公衆栄養学の知識として理解すべき内容を記述している。内容的には一定の高度な内容量を含んでいるので、教育担当者が参考にして教育するような使用も可能である。(342頁) (田中平三、徳留信寛、伊達ちぐさ編著、著者、吉川賢太郎、早淵仁美、武見ゆかり、八木典子、他多数) 担当部分：第2章A社会環境と健康・栄養問題 わが国の人口問題、人口構成の変化と少子高齢化の問題、少子化の問題、長寿社会のありかた、長寿社会と健康問題、食糧問題等について記述。(pp.19~25 単著)</p>

<p>(8) 公衆栄養学実習 (第1版)</p>	<p>平成20年 4月</p>	<p>同文書院 公衆栄養学実習は、未だに実習の方向性が確立されていないが、特に地域公衆栄養活動に真正面から取り組む実習書は少ない。本書は、だれでも地域公衆栄養活動の基本が学べるようにマニュアル化して、活動の展開を追って実習ができるように工夫されている。(187頁) (二見大介編著、著者押野栄司、田中久子、八木典子、他多数) 担当部分：第3章2 地域栄養計画 計画・実施・評価の進め方、3地域栄養計画の具体的な展開事例 地域栄養計画を立てるための課題の設定方法、目標の設定の仕方を具体的なシート記入例を基に実習できるよう工夫した。さらに、設定した目標に基づく計画策定の方法、計画策定の重要点のチェック方法、計画を有効に実践するためのチェックポイント、評価方法の実際について実習スケジュールに合わせて実習できるよう、見本シート等を示した。さらに、地域計画の具体的な展開例を示して、地域計画のポイントを再度確認できるようにした、公衆栄養学実習のための実習書 (pp. 97～126 単著)</p>
<p>(9) 公衆栄養学ワークブック (第1版)</p>	<p>平成21年 8月</p>	<p>みらい 公衆栄養学の実習書で、第一部 (UNIT 1) の食事調査の実際と第二部 (UNIT 2) の公衆栄養活動計画策定の実際からなる。各UNITは、実習内容順にさらに細かくグループ化され、各グループでの実習目的を明示してあり、ワークシートを元に具体的な実習を組むことができる。課題ごとのデータや解析方法、レポートフォーム等は電子媒体で行なうようにしてあり、自分で実習を行うことができるように工夫されている。(211頁) (徳留裕子、北川郁美、八木典子編著 書者 今枝奈保美、後藤千穂 他6名) 担当部分：UNIT2-2 地域アセスメント プリシード・プロシードモデルを使って、プリシード部分に当たるアセスメントの方法を実習により学ぶことを目的としている。プリシードは4段階に分かれているため、第1段階から第4段階におけるアセスメント方法についてワークが行なえるようにしている。(pp. 94～102単著) 2-3 優先課題の選定と重点目標の設定 有効な公衆栄養活動を実施するために優先すべき課題を選択し、課題を達成するための具体的な目標を設定する手法を身につけるためのワークが行えるようにしている。(pp. 103～111 単著) 2-5 計画の立案 短期、中期、長期目標を達成するための計画の立案方法についてワークが行なえるようにしている。(pp. 119～125 単著) 2-7 公衆栄養活動における説明・報告 公衆栄養活動の様々な場面におけるプレゼンテーション、報告書、説明方法等のあり方についてワークが行なえるようにしている。 (pp. 140～148 単著)</p>

<p>(10) これからの公衆衛生学—社会・環境と健康 (初版)</p>	<p>平成22年 2月</p>	<p>南江堂 管理栄養士教育のための公衆衛生学の教科書は、医学部の衛生学・公衆衛生学の教育を基本に記されているものが多く、管理栄養士に必要な公衆衛生学の知識を主体に記述されているものは少ない。本書は、管理栄養士国家試験ガイドラインの内容を逸脱することなく、平易な言葉で解説している点が優れている。(354頁) (田中平三編著、著者 東あかね、内藤義彦、八木典子、他多数) 担当部分：第12章 母子保健 母子保健の概要、母子保健対策、母子健康手帳の交付と母子保健の向上、健康診査の概要、母子保健事業の概要、子育てのための環境整備、母子保健の課題の概要、医療保護と母子保健、母子保健の基盤整備の現状等について記述。 (pp. 211～216 単著) 第22章 保健・医療・福祉・介護関連法規 法の概念、衛生法規の概要、主な衛生法規の概説、栄養関連法規の概要、主な栄養関連法規の概説等について記述。(pp. 305～310 単著)</p>
<p>(11) これからの公衆衛生学—社会・環境と健康 (改訂 第2版)</p>	<p>平成25年 3月</p>	<p>南江堂 (10)教科書内容を、管理栄養士国家試験ガイドラインの改訂に即して改訂した。(342頁) (田中平三編著、著者 東あかね、内藤義彦、八木典子、他多数) 担当部分：第11章 母子保健 母子保健の概要、母子保健法の概説、母子保健対策の概要、妊娠届けと母子健康手帳の交付、健康診査の概要と目的、保健指導内容の概説、医療対策、すこやか親子21の概説、母子保健の基盤整備、少子化対策、子ども・子育てビジョン等について記述。(pp. 269-277)</p>
<p>(12) 公衆栄養学 (初版)</p>	<p>平成23年 3月</p>	<p>朝倉書店 管理栄養士教育のための公衆栄養学の教科書は、多くが管理栄養士国家試験ガイドラインの内容構成に準拠して記載されているが、本書では、順を追って学習すると、より理解し易くなるように、内容構成を変えたものにした。国家試験新ガイドラインでは、本書のような内容構成に変更されたが、あくまでも学生が理解しやすい構成にするという特色を持った教科書である。(150頁) (八木典子、早川史子編著、著者 八木典子 他多数) 主編者 担当部分：第1章 概念 公衆栄養学の概要、公衆栄養学の考え方、公衆栄養活動の重要性、生態系の維持と食環境等について記述。(pp. 1～2 単著) 7章 公衆栄養プログラム計画の概要 公衆栄養活動計画策定における行動科学理論モデルの活用と体制作り、コミュニティオーガニゼーション、健康・栄養課題設定手順、課題の必要性・優先性、目的の明確化と計画設定等について記述。(pp. 93-99 共著) 第8章 公衆栄養プログラムの実際 計画策定の手順、運営面のアセスメント、政策面のアセスメント、計画書の作成等について記述。(pp. 100～106 共著)</p>

<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価</p> <p>(1) 教育・研究指導上の能力に関する評価 (評価者：広島国際大学 学長)</p>	<p>平成25年5月</p>	<p>当該教員は、甲子園大学において35年間勤務し、長期にわたり管理栄養士の養成に携わってきた。公衆衛生学30年、公衆栄養学27年の教育経験を持ち、現在までの教育の経験を評価されて、管理栄養士教育に関連する学会における管理栄養士教育のコアカリキュラム作成委員や国家試験ガイドラインの作成委員、国家試験問題作成委員としても活動している。現場経験は無いが、行政機関の地域計画委員や神戸市医療審議会委員等での活動、公的機関における食事調査、食生活調査、県民の健康意識調査等の検討委員を兼任しており、行政機関での公衆衛生、公衆栄養の地域計画、改善の方向性を理解し、教育に反映できていると考える。以上のことから、本学において予定している授業科目を担当するに十分な教育上の能力を有していると考え</p>
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項</p> <p>なし</p>		
<p>5 その他</p> <p>(1) 全国栄養士養成施設協会 表彰 日本 栄養士会 会長 表彰 栄養士養 成功労者知事表彰 (兵庫県知事)</p> <p>(2) 「公衆栄養学実習」と臨地実習 (公衆栄養学) との連携教育による公衆栄養活動の理解、実践力の向上</p> <p>(3) 「管理栄養士養成課程カリキュラムの作成」</p>	<p>平成13年11月 平成21年 6 月 平 成26年 5 月</p> <p>平成9年 4月 ～ 平成21年 3月</p> <p>平成19年 4月 ～ 平成20年 3月</p>	<p>長年の管理栄養士養成への貢献について表彰された</p> <p>公衆栄養学実習は、地域の診断とそれに伴う改善課題の設定、計画・実践・評価の基礎訓練をすることを必用としている。そこで、臨地実習：公衆栄養学 (保健所) の実習と連携し、臨地実習時に実習先の保健所管轄地域の地域診断に必要なデータをできるだけ多く集め、そのデータをもとに、学内の実習で地域診断を行い、実習先の保健所の管理栄養士になったつもりで、改善課題設定、計画策定、評価計画の策定を行う実習に結び付けるようにする。臨地実習施設との連携により、従来、臨地実習内容で理解が乏しかった地域の特性把握が少しでも具体性を持って理解できるのではないかと考えている。</p> <p>甲子園大学における管理栄養士養成課程のカリキュラム検討会の一員として、カリキュラムのあり方を検討し、実践的で、質の高い管理栄養士の教育を目的に、管理栄養士必修各科目の教育内容、年次配当を決め、教育実践に至った。また、管理栄養士の資格はもちろん、管理栄養士としてのプラスαの特色を持った人材を養成するためのコースを作り養成の質の向上を目指した。</p>

<p>(4) 甲子園大学栄養学部栄養学科における教育実績</p> <p>「公衆衛生学Ⅰ」「公衆衛生学Ⅱ」</p> <p>「公衆衛生学実習」</p> <p>「健康情報処理演習」</p> <p>「健康管理概論」</p> <p>「医動物学実験」</p> <p>「公衆栄養学Ⅰ」「公衆栄養学Ⅱ」</p> <p>「公衆栄養学実習」</p> <p>「応用栄養学」</p>	<p>昭和55年 4月 ～ 平成26年 3月 平成30年～現在に 至る</p>	<p>甲子園大学栄養学部栄養学科の専任教員（昭和55年4月から昭和60年3月まで講師、昭和60年4月から平成9年3月まで助教授、平成9年4月から平成26年3月まで教授）として、以下のような科目を担当した。</p> <p>昭和55年～平成16年 管理栄養士教育に必要な公衆衛生学の講義を行った。公衆衛生の知識は、栄養行政を学ぶ公衆栄養学の基礎知識となるため、できるだけ公衆栄養学と連動させるよう工夫し、衛生行政を身近に捉える事ができるような知識として教育できた。</p> <p>昭和55年～平成7年 生活環境に関する実習で、水質の測定、温度・湿度・気流測定、環境汚染物質の測定等を行い、環境の変化と健康状態を理解する目的で行った。測定サンプルや測定場所・条件を各班ごとに変えて測定し、結果を得て考察を加えた後に、報告会を開き相互ディスカッションをする中で、得られたデータに対する理解が深まったと考える。</p> <p>平成15年～平成21年 1.正しい健康情報の提供源の理解 2.健康情報データの解析方法の習得 3.疫学指標の理解と算出方法の理解 4.健康情報の活用実践 を行い、地域アセスメントに必要なデータ収集、解析が十分行なえるような能力を身につけることを目的に行なった。（公衆衛生実習に含まれる分野）</p> <p>平成9年～平成16年 公衆衛生学の中で健康管理に特化した部分の講義。健康の考え方、健康づくりの概論、健康行政、健康増進施策の実践方法等についての講義。健康行動変容論は栄養教育論の行動変容論部分の基礎知識、健康増進施策の実践方法の部分は郷愁栄養活動の実践部分の基礎知識となるため、関連性が理解できるよう工夫した。</p> <p>昭和60年～平成15年 衛生検査技師科目であるが、衛生害虫、寄生虫等のいわゆる医動物の生態を説明し、寄生虫等の虫卵や生体の検出を行った。管理栄養士教育でも食品衛生学に関連する内容であり、顕微鏡で実際に寄生虫卵等を見たり、成虫標本を見ることで理解が深まったと考える。</p> <p>昭和60年～平成22年 平成30年～現在に至る地域における栄養行政について講義した。本科目は、公衆衛生における衛生行政が基礎知識となるため、公衆衛生学の内容を復習しながら、公衆栄養学との関連を認識させるように工夫した。</p> <p>平成9年～平成21年 平成30年～現在に至る 地域栄養改善のマネジメントに関する実習。地域アセスメントの方法、アンケートの取り方、改善課題の設定、重点対象者の選定、計画運営アセスメント、計画書の作成、報告書の作成等。本実習は、現場実習である臨地実習（公衆栄養学）の体験や現場でのデータ収集も取り入れた実習とし、実践的なイメージを持った実習とすることができた。</p> <p>平成18年～平成23年 思春期から高齢期に渡るライフステージの生理と各ライフステージに適したアセスメントの方法およびアセスメント結果に伴う栄養管理の方法について講義した。さらに、スポーツ栄養を含む、特殊環境下における生理とアセスメントの方法および栄養管理の方法についても講義した。</p>
---	---	--

<p>「食事摂取基準論」</p> <p>「基礎栄養学」</p> <p>「食品安全論」</p> <p>「食品の安全衛生管理実習」</p> <p>(5) 広島国際大学医療栄養学部医療栄養学科における教育実績</p> <p>「公衆衛生学Ⅰ」「公衆衛生学Ⅱ」</p> <p>「社会環境と健康・栄養政策」「公衆栄養マネジメント」</p> <p>「公衆栄養学実習」</p>	<p>平成20年～平成24年、平成29年～現在に至る</p> <p>平成24年</p> <p>平成23年～平成26年</p> <p>平成23年～現在に至る</p> <p>平成26年 4月 ～ 平成29年 3月</p> <p>平成26年4月～平成30年</p> <p>平成26年4月～平成30年</p> <p>平成26年4月～平成30年</p>	<p>食事摂取基準の考え方、活用について、栄養学や生理学の基礎知識を復習しながら、これらの科目と関連づけて理解を深めた。管理栄養士は、食事摂取基準の理解が重要であるので、2単位の時間で行っている。</p> <p>管理栄養士科目の基礎栄養学を担当。栄養学は、学生の理解が十分なされない科目の一つであるので、小テストや復習講義を取り入れて、理解が深まるような講義を行い、一定の効果が評価できた。</p> <p>食品衛生に関する知識を講義する。管理栄養士は、大量調理等で安全な食事の提供を行うことが絶対の職務責任であるため、実例も含めて、管理栄養士における食の安全管理の基本的考え方を身につけることができるようにした。</p> <p>本実習は、大量調理における安全・衛生管理の実践力を身につけることを目的とした実習である。したがって、3コマ8回の実習であるが、はじめに大量調理マニュアルの考え方と安全衛生管理について、給食管理実習室の設計のあり方も含めて確認する。2,3回は現場で簡単にできる水質管理と環境管理（公衆衛生実習の環境管理部分）、4,5回は、食品・調理器具・手指・布巾等の汚染と管理、食品の貯蔵と保存方法（食品衛生関連の実習）、6,7回は、大量調理室内での衛生管理状況の評価（各班で評価課題を考え、2～5回までの測定技術を用いてデータにより評価・考察を加える）、8回は、各班で評価した内容を踏まえた、大量調理における衛生管理実践マニュアルの作成と相互評価をしている。</p> <p>広島国際大学医療栄養学部医療栄養学科の専任教員（平成26年4月から平成30年3月に至るまで教授）として、以下のような科目を担当した。</p> <p>管理栄養士教育に必要な公衆衛生学の講義を行った。公衆衛生の知識は、栄養行政を学ぶ公衆栄養学の基礎知識となるため、できるだけ公衆栄養学と連動させるよう工夫し、衛生行政を身近に捉える事ができるような知識として教育できた。</p> <p>地域における栄養行政について講義した。本科目は、公衆衛生における衛生行政が基礎知識となるため、公衆衛生学の内容を復習しながら、公衆栄養学との関連を認識させるように工夫した。</p> <p>講義で学んだ公衆栄養マネジメントの知識を、実習を通して、実践の中で活用できるような訓練を行った。。実習の中では相互評価を行いマネジメントに必要な基本的な考え方を系統的に理解できるように工夫した。</p>
--	---	---

<p>「食事調査実習」</p> <p>「ライフステージ栄養学」「スポーツ栄養学」</p> <p>「応用栄養学実習」</p>		<p>平成26年4月～平成30年 食事調査の種類と方法およびその特徴を理解することを主目的に実習を行った。また、真の値に近いデータを得るために注意すべきポイントやデータの分析についても各実習ごとに相互評価と意見交換を行いながら体験させる工夫を行った。</p> <p>平成26年4月～平成30年 ライフステージや特殊環境下で生じる生体の変化を、生理学・病理学を復習しつつ確認させる講義とした。その後、生体の変化を把握するアセスメントの方法について学び、さらに、生体の変化に対応する栄養管理の方法を学ばせることで、関連科目のつながりが理解できるように工夫した。</p> <p>平成26年4月～平成30年 講義で学んだライフステージ別の栄養管理の知識を、食事管理につなげる実習とした。各実習では、班ごとに異なる事例を与え、アセスメントから食事提供までの展開と栄養管理のポイントの把握、実際の食事作成、試食を通して総合的な評価を、毎回の実習で行った。</p>
---	--	---

職務上の実績に関する事項				
事項			年月日	概要
1 資格, 免許				
(1) 中学1級、高校1級普通免許 (2) 栄養士免許取得 (3) 管理栄養士免許取得			昭和48年 4月 昭和47年 5月 昭和60年11月	中学1級、高校1級普通免許 (家庭科) 登録番号 奈良県1626 登録番号27745
2 特許等				
なし				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
なし				
4 その他				
日本栄養改善学会 管理栄養士養成コアカリキュラム委員 (1期、2期)			平成15年 8月 ～ 平成20年 5月	管理栄養士教育においてコアになる教育内容を項目だてて設定し、各項目について学生がどの程度まで習得すべきかを示すことで、管理栄養士教育の一定の水準を共有化することを目的としている。コアになる部分は、管理栄養士教育の60～70%内に収まるように設定し、残りの30%程度は各養成校で特色を持たせた管理栄養士教育を行うように設定した。 コアカリキュラムの設定が、管理栄養士教育の質の差を少なくし、一定水準の教育がなされるようにするために大きな役割を果たしている。
管理栄養士国家試験出題 委員			平成21年 8月 ～ 平成25年 4月	管理栄養士国家試験問題 (公衆栄養学) の問題作成に当たった。
管理栄養士国家試験出題基準改定検討会 委員			平成22年 3月 ～ 平成22年12月	管理栄養士国家試験問題 (公衆栄養学) の従来の出題基準を検討し、管理栄養士教育に重要であると考えられる内容をまとめて新しい出題基準を検討した。
研究業績等に関する事項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
1 若者の生活、食・栄養と健康	共著	平成16年 4月	日本学会事務センター	日本衛生学会学術総会でのワークショップを基にして出版された。健康上問題の多い若者に視点をあてて、多面的に若者の健康状態と置かれている環境について分析を加えている。(205頁) 日本衛生学会監修 (木村美恵子、新保慎一郎編、著者池田正之、木村美恵子、八木典子、他多数) 担当部分：若年期の食生活習慣からみた生活習慣予防 食生活調査を通して、若年期における親からの食生活教育と食生活習慣が、肥満を含めて生活習慣病の発症にどのように関わっているかを検討し報告した。(pp. 73 ~ 86 単著)
2 The SAM Model of Senescence	共著	平成6年 3月	Excerpta Medica	老化促進モデルマウスの国際学会の発表の中から、発表内容をまとめて本に示し、老化促進モデルマウスを用いた老化研究の最先端の紹介をおこなったもの。(458頁) (T. Takeda, N. Yagi, 他多数) 担当部分 ; Effect of gender and exercise on aging in the senescence accelerated mouse (SAMP8//Ya) 雌雄の老化促進モデルマウスに対し強制的な運動負荷を行った場合、雌に比べ雄は運動の持続性に乏しく、老化状態も雌に比べて著しく進行することを報告した。 担当部分 ; 主研究 (Yagi N., Yagi H.) (pp. 401~404)

3	ビタミンE研究の進歩Ⅷ 《査読付き》	共著	平成10年 2月	共立出版	第8回ビタミンE研究会の発表演題と国際ビタミンEシンポジウムの中から選択し、ビタミンEに関する最新研究の紹介をおこなったもの。(221頁) (新井洋由、八木典子、他多数) 担当部分：「老化による学習・記憶障害に及ぼすα-トコフェロール投与の影響について」の章(pp.145~150) 老化促進モデルマウスを用い、α-トコフェロールの投与と老化による学習記憶障害抑制の関連を検討した。(単著)
4	ビタミンE研究の進歩ⅩⅡ 《査読付き》	共著	平成18年 2月	共立出版	第12回ビタミンE研究会の発表演題の中から選択し、ビタミンEに関する最新研究の紹介をおこなったもの。(238頁) (八木典子、他多数) 担当部分：老化に伴う生体内のα-tocopherol, TBARSの変動と学習記憶について(pp.109~114) 老化促進モデルマウス(SAMP8)と正常老化を示すマウス(SAMR1)を用い、老化の進行状況およびそれに伴う学習記憶の低下状況と生体内過酸化脂質の増加とビタミンEの変動を検討した。結果、老化により学習記憶状態の悪化するSAMP8で有意に生体内ビタミンEの減少と過酸化脂質の増加が認められたことから、生体内酸化と学習記憶の低下が関連していることを報告した。八木は研究全体の指導を行った。 野口聡裕、平賀景子、副田久美子、八木典子
(学術論文)					
1	Influence of diet on the induction of hepatic ceroid pigment in rats by polychlorinated biphenyls. 《査読付き》	共著	昭和51年 4月	Toxicol. Appl. Pharmacol. Vol. 36 pp131-141	PCBを投与すると、飼料中の脂肪酸組成の異なりにより脂肪肝を生ずる場合と黒色肝を生ずる場合があることを報告した。さらに、黒色肝を組織的に検討すると、過酸化脂質とたんぱく質の結合したセロイド色素が沈着していることが判明した。この研究により、PCB投与が生体内の過酸化脂質を急速に促進することが明らかになり、PCB投与と生体内過酸化のメカニズムを検討する元になった論文である。博士学位論文の一部(11頁) (Itokawa Y., Yagi N., Kaito H., Kamohara K. and Fujiwara K.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)
2	Sodium potassium magnesium and calcium levels in polychlorinated biphenyl(PCB) poisoned rats. 《査読付き》	共著	昭和51年11月	Bull. Environ. Contam. Toxicol. Vol. 16 pp516-519	実験動物(ラット)にPCBを投与した時の生体中ミネラルの変動について検討を加えた結果を報告した。(4頁) (Yagi N., Kimura M., Itokawa Y.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)
3	The isolation and characterization of a lethal protein from Kintoki beans. 《査読付き》	共著	昭和52年12月	J. Nutr. Sci. Vitaminol. Vol. 23 pp525-534	金時豆を生で実験動物に与えると死に至る植物毒が存在することが判明した。そこで、この植物毒を精製して毒物の性状を検討し、報告した。つまり、単一になった毒物は、糖と結合したたんぱく質であり、ヘムのアグルチニン作用をもつものであった。本論文の主体は八木修士論文(10頁) (Hamaguti Y., Yagi N., Nishino A., Mochizuki T., Mizukami T., Miyoshi M.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)

4	Effect of subacute manganese feeding on serotonin metabolism.	共著	昭和53年11月	J. Toxicol. Environ. Health Vol. 4 pp701-707	実験動物にマンガンを過剰投与した場合のセロトニン代謝について検討した。(7頁) (Kimura M., Yagi N., Itokawa Y.) 担当部分：共同研究につき、本人担当部分抽出不可能。(担当頁特定不可能)
5	Thiamine deficiency induced by PCB and DDT administration to rat. 《査読付き》	共著	昭和54年 4月	J. Environ. Pathol. Toxicol. Vol. 2 pp1119-1125	有機塩素系薬剤をラットに投与すると、生体中のビタミンB1量が減少することが判明したが、さらに研究を進展させて、本研究を行った。つまり、生体中のビタミンB1減少量と有機塩素化合物の塩素結合場所との関係が深いことが判明した。(7頁) (Yagi N., Kamohara K., Itokawa Y.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)
6	Cleavage of thiamine by residual chlorine in tap water. 《査読付き》	共著	昭和54年 8月	J. Nutr. Sci. Vitaminol. Vol. 25 pp281-287	水道水中の遊離塩素がビタミンB1を分解する機構を解明して報告した。遊離塩素の分解効果は、フリーのB1でもっとも強く、TDP, TTPになるにつれて分解されにくくなることも判明した。(7頁) (Yagi N., Itokawa Y.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)
7	PCB及びDDT投与ラット肝臓の組織化学的検索	単著	昭和55年 6月	日本衛生学雑誌 Vol. 35 p p. 524-532	PCB投与ラットに関する肝臓の組織学的検索をおこない、セロイド色素の沈着が生ずることを報告した。本研究は、この研究をさらに発展させ、PCBと同様の有機塩素系薬剤であるDDT投与ラットにおいても肝臓にセロイド色素の沈着が生ずるかどうかが検討した。結果は、DDT投与ラットにおいては著しいセロイド色素の沈着は認められず、有機塩素系薬剤でも薬物代謝酵素活性や排泄経路の異なりによって生体に対する影響が異なることを報告した。博士学位論文内容(9頁)
8	PCB投与ラットの肝臓脂質代謝について 《査読付き》	単著	昭和55年 8月	日本衛生学雑誌 Vol. 35 p p. 659-664	PCBを投与したラットの肝臓は、異常に肥大し、脂肪肝を生ずるが、本報告はその機構について脂質の合成系を主体に解明した報告である。つまり、PCB投与により総脂質・リン脂質・トリグリセライド・コレステロールの著しい増加が生じ、特に肝臓へのコレステロール蓄積が著しい結果を得た。博士学位論文内容(6頁)
9	Lipid metabolism in polychlorinated biphenyl(PCB) poisoned rats. 《査読付き》	共著	昭和55年12月	Environ. Research Vol. 22 pp. 139-144	PCBを投与したラットで脂肪肝を生ずる機構について、生体内脂質の動向を総合的に捉えることにより検討を加えて報告した。つまり、生体内脂質の合成・移動速度を測定すると、コレステロールの合成および他の組織から肝臓への移入が著しく、肝臓から他の組織への流出が間に合わない状態で脂肪肝が生じていることが判明した。このコレステロール合成の増加は、PCBの排泄機構と深く関係していることも判明した。博士論文内容。(6頁) (Yagi N., Itokawa Y.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)
10	Mechanism of lipid peroxide formation in polychlorinated biphenyls(PCB) poisoned rats. 《査読付き》	共著	昭和59年 6月	Environ. Research Vol. 34 pp18-23	PCB投与ラット生体内での過酸化脂質生成機構およびPCB排泄機構を解明した報告。(6頁) (Yagi N., Kamohara K., Itokawa Y.) 担当部分：主で研究を担当。共同研究者と、本人担当部分抽出不可能。(担当頁特定不可能)

11 Effect of differences in diet composition on polychlorinated Biphenyls poisoning. 《査読付き》	共著	昭和60年 6月	Bull. Environ. Contam. Toxicol. Vol. 34 pp709-714	PCBの毒性は飼料中の脂肪酸組成の違いで異なることを報告したが、この毒性はPCB投与後ただちに出現するのではなく、一定期間後に出現する。このことから、PCBそのものの毒性よりもPCBの分解で生ずる物質による毒性の影響が強く現れることが判明し、飼料中の脂肪酸組成はPCB分解に対して影響を与えることを報告した。(6頁) (Yagi N., Kamohara K., Itokawa Y.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)
12 性差が老化に及ぼす影響—SAMを用いて— 《査読付き》	共著	平成6年 3月	甲子園大学紀要 Vol. 21 pp67-72	雌雄の老化促進モデルマウスを用い、性差の違いによる老化状態の進行を検討した結果、雄の方がストレスに弱く、ストレス負荷により老化が進行することを認め、報告した。(6頁) (八木、正井) 担当部分：主で研究全般を担当及び研究指導 (担当頁特定不可能)
13 母ラットにおけるMg, K, Caの摂取量の違いが仔ラットに及ぼす影響について 《査読付き》	共著	平成6年12月	マグネシウム Vol. 13 pp153-162	ラットを用い、妊娠中および授乳中の母ラットのMg, Ca, Kの摂取量の違いが、仔ラットの生体中のミネラルの変動に及ぼす影響について検討した。(10頁) (八木、中田、新居田、石田、伊東、糸川) 担当部分：主で研究全般を担当及び研究指導 (担当頁特定不可能)
14 ラットのMg, Ca欠乏 食摂取における血漿中のMg, Ca量の変動について 《査読付き》	共著	平成 7年 3月	甲子園大学紀要 Vol. 22 pp. 83-88	生体中の遊離型と結合型Mgの分画方法について検討すると同時に、栄養条件が遊離型と結合型Mgに及ぼす影響についても研究をおこなった。その結果、生体中の結合型Mgはアルブミンまたはグロブリンに結合している可能性が示唆された。さらに、飼料中のMg, Ca量を変えた餌で飼育したラット血漿を用いて、血漿中の遊離型と結合型Mg量を検討すると、Ca欠乏飼料の方がMg欠乏よりも結合型Mgの変動に影響を与えることが判明した。(6頁) (八木典子、安田俊彦、丸山容弘) 担当部分：主で研究全般を担当及び研究指導 (担当頁特定不可能)
15 ストレスが老化におよぼす影響について 《査読付き》	共著	平成 8年 4月	日本衛生学雑誌 Vol. 51 p. 458	老化促進モデルマウスに対する拘束ストレス負荷時間の違いによる影響を検討した。外観的老化度は、ストレスにより著しく悪化したが、ストレス時間の差よりもストレスを負荷するかどうかの差で影響が大きかった。学習・記憶障害の進行は、拘束ストレス負荷ではいずれの時間においても認められなかった。(1頁) (八木典子、木戸信江、鷺谷朋子) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)
16 拘束ストレスが老化に及ぼす影響について 《査読付き》	共著	平成 9年 3月	甲子園大学紀要 Vol. 24 pp. 95-99 □	拘束ストレスが老化に及ぼす影響について検討した。その結果ストレス負荷により負荷直後の体重減少、外観的老化度の促進、平均寿命の短縮、胃潰瘍および脂肪肝の出現が認められた。さらに、1日の活動量の増加が生じるとともに、老化による学習・記憶障害の進行は抑制されることを認めた。(5頁) (八木典子、木戸信江、垂水悟史、堀ノ内加奈、鷺谷朋子) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)

<p>17 強制運動もしくは拘束ストレスが老化に及ぼす影響について 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成 9年 4月</p>	<p>日本衛生学雑誌 Vol. 52 p. 174</p>	<p>強制的な運動員荷と拘束ストレスが老化に及ぼす影響について比較検討した。その結果、心理的にも強いストレスを受けると考えられる拘束ストレスでは、ストレス負荷時間に関係なく体重減少、老化度の進行が認められるが、精神的緊張のためか学習・記憶は良好であった。一方、強制的な運動負荷のように身体的疲労を伴うようなストレスは負荷時間によって老化度および学習・記憶障害の進行が認められた。(1頁) (八木典子、鷺谷朋子) 担当部分：主で研究全般を担当及び研究指導 (担当頁特定不可能)</p>
<p>18 老化促進モデルマウス (SAM) の老化に伴う脳ミネラルの変動 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成10年 3月</p>	<p>甲子園大学紀要 Vol. 25 pp. 27-31</p>	<p>老化促進モデルマウス (SAMP8) と正常老化を示すSAMR1系マウスを用い、老化に伴う学習・記憶障害の進行と脳ミネラルの変動について検討した。その結果、Caは老化の促進したマウスの方で蓄積が著しく、特に老化に伴う学習・記憶障害が著しく生ずる20週齢以降で海馬への蓄積が増大した。CuはSAMP8において大脳皮質での変動は認められなかったが、皮質以外の部位での増加が認められた。MnはSAMR1、P8ともに週齢を重ねるにしたがって増加を示した。(5頁) (八木典子、梅田英範、下嶋博子、堤慎子、山崎直子、鷺谷朋子) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)</p>
<p>19 強制運動および拘束ストレスが肝臓の脂質代謝に及ぼす影響について 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成10年 3月</p>	<p>日本衛生学雑誌 Vol. 53 p. 362</p>	<p>老化促進モデルマウスの老化とストレスの関係について、肝臓中の脂質代謝を主体に検討を加えた。その結果、ストレス負荷1日目に脂質代謝の著しい変動が生じ、10日間連続負荷をするとストレスに対する慣れが生じて脂質代謝の変動が少なくなることを報告した。また、肉体疲労を伴うようなストレスよりも精神均なストレスによって脂質の変動は著しく生ずることも判明した。(1頁) (八木典子、堀ノ内加奈、鷺谷朋子) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)</p>
<p>20 Spontaneous and artificial lesions of magnocellular reticular formation of brainstem deteriorate avoidance learning in senescence-accelerated mouse SAM 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成10年 9月</p>	<p>Brain Research Vol. 791 pp. 90-98</p>	<p>老化促進モデルマウス (SAMP8) は、生後まもなくの時点から脳幹部に海綿状変性を生じ、週齢を重ねるにつれて変性が拡大する。それとともに、学習・記憶状態の悪化を生じることが判っているが、海綿状変性と学習・記憶との関連は証明されていない。本論文は、この関連を証明し、脳幹部が学習・記憶障害に関与している可能性を論述したものである。(9頁) (Yagi H. Akiguchi I. Ohta A. Yagi N. Hosokawa M. and Takeda T.) 担当部分：脳海綿状変性状態と学習記憶の関連があることを証明する研究を、特に抗酸化物質を用いて行った。 (担当頁特定不可能)</p>
<p>21 ラットに対する運動負荷の違いが生体に及ぼす影響 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成11年 3月</p>	<p>甲子園大学紀要 Vol. 26 pp. 59-62</p>	<p>実験動物を用い、運動強度および運動形態が生体に及ぼす影響を検討すると共に、運動を中止した場合の生体に対する影響についても検討を行った。運動負荷形態は、マラソン型、中間型、スプリント型とし、ヘマトリット値、肝臓重量、骨硬度を主体に検討した。その結果、ヘマトリット値の改善は、マラソン型負荷が有効であり、中間型、スプリント型の有効性は認められなかった。一方、骨硬度はスプリント、中間型での効果が認められ、運動中止した場合も一定効果は持続することを報告した。(4頁) (八木典子、山本純美、三木康司) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)</p>

22 老化促進モデルマウス (SAM)の老化に伴う脳中 SOD, カタラーゼ, GSH-PX, TBARS, α -コフェロールの変動《査読付き》	共著	平成11年 3月	甲子園大学紀要 Vol. 26 pp. 53-57	老化促進モデルマウスを用いて、老化に伴う脳中の過酸化脂質の変動を検討した。その結果、SOD活性は、老化に伴い小脳部位において活性低下が認められた。カタラーゼ活性はSOD活性と反対に老化に伴い小脳部位での活性上昇が認められた。 α -コフェロール量は老化に伴い大脳皮質および小脳部位で減少が認められ、TBARSは増加を認めたが、特に小脳部位で著しかった。このことから、老化に伴う脳中過酸化脂質の変動は、小脳部位で鋭敏に反応することが判明した。(5頁) (八木典子、山崎直子) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)
23 ラットに対するカプサイシン投与が体重減少とエネルギー消費に及ぼす影響《査読付き》	共著	平成12年 10月	日本栄養・食糧学会誌 Vol. 53, No. 5 pp. 227-231	若齢期、高齢期における肥満ラットに、カプサイシンを投与することにより、肥満状態がどの程度改善するかを検討した。その結果、肥満ラットにカプサイシンを投与すると体重減少、血漿トリグリセライド量の減少、血漿グルコース量の上昇、脳中エピネフリン量の上昇が生じることが判明した。さらに、若齢期と高齢期を比較すると、若齢期よりも高齢期の肥満ラットの体重減少が著しく生じる結果を得た。(5頁) (八木典子、野口聡裕、岡田彩) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)
24 Long-Term Ingestion of Dietary Diacyl- glycerol Lowers Serum Triacyl glycerol in Type II Diabetic Patients with Hyper- triglyceridemia	共著	平成13年 8月	J. Nutr. Vol. 131 pp. 3204 -3207	臨床試験において、血糖値のコントロールはできても、血清トリグリセライドが高値を示す患者に対し、ジアシルグリセロールを食事脂肪として与えると、血清トリグリセライドの減少が認められた。このことは、従来の厳しい脂肪制限が緩和されるとともに、患者のQOLの維持にも有効であることを報告した。(4頁) (K. Yamamoto, H. Asakawa, K. Tokunaga, H. Watanabe, N. Matsuo, I. Tokimitsu And N. Yagi) 担当部分：主著者の博士論文のため、研究の方向付けと研究全般の指導 (担当頁特定不可能)
25 肥満2型糖尿病患者と肥満大学生の食嗜好に関する研究	共著	平成14年12月	肥満研究 Vol. 8 No. 3 pp. 66 - 70	肥満傾向にある大学生とすでに肥満を伴う糖尿病になっている患者の食嗜好に関するアンケート調査を行い共通の嗜好には主食の重ね食いがあることを報告した。したがって、若い世代からの栄養教育、食生活指導は、穀類過剰摂取の食嗜好も考慮に入れて行うことが重要であるとした。(5頁) (山本國夫、八木典子、徳永勝人) 担当部分：研究の発案と学生に対する調査分析及び研究全般の指導 (担当頁特定不可能)
26 Effects of diacylglycerol administration on serum triacylglycerol in patient homozygous for complete lipoprotein lipase deletion.《査読付き》	共著	平成17年	Metabolism 54, pp. 67-71	LPL欠損症で長期にわたり脂肪摂取制限を強いられる患者に対し、ジアシルグリセロールを食事脂肪として与えると、血清トリグリセライドの減少が認められ、ジアシルグリセロールを指示どおりに摂取しておれば、血中のトリグリセライドのコントロールが可能であることを報告した。(5頁) (K. Yamamoto, K. Tokunaga, H. Asaka, S. Meguro, H. Watanabe and N. Yagi) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)

27 Diacylglycerol oil ingestion in type-2 diabetic patients with hypertriglyceridemia 《査読付き》	共著	平成18年	NUTRITION Vol. 22(1), pp. 23-29	糖尿病性心疾患の発症にHDL-CとLDLのparticle sizeが影響しているとされている。そこで、高トリグリセライド血漿を伴う2型糖尿病患者にジアシルグリセロール(DAG)またはトリアシルグリセロール(TAG)を含む脂肪を摂取させ、HDL-CとLDLのparticle sizeの変動を検討した。結果、(DAG)群の方でHDL-Cおよびapolipoprotein-AIが著しく高く、PPAI-1濃度は有意に低くなっていた。また、particle sizeのLDL粒子サイズが大きくなっていた。このことから、DAGは糖尿病患者の脂質代謝改善に有効である可能性を報告した。(7頁) (Yamamoto K., Takeshita M, Tokimitsu I., Watanabe H., Mizuno T., Asakawa H., Tokunaga K., Tatsumi T., Okazaki M. and Yagi N.) 担当部分：主著者の博士論文のため、研究全般の指導 (担当頁特定不可能)
28 Beneficial effects of diacylglycerol oil in a diet therapy for patients with type2 diabetic nephropathy 《査読付き》	共著	平成18年	Diabetes Care 29(2), pp. 417-419	腎炎を伴う糖尿病患者にジアシルグリセロール(DAG)をトリアシルグリセロール(TAG)に代えて与えることにより腎障害の進行が延期されることを報告した。(3頁) (Yamamoto K., Tomonobu K., Asakawa H., Tokunaga K., Hasse T., Tokimitsu I. and Yagi N.) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)
29 高校1年生野球部員の身体組成に及ぼす栄養指導の効果 《査読付き》	共著	平成18年	栄養学雑誌 64(1), pp. 13-20	高校1年生に入学した野球部の生徒に対し、栄養教育・食事指導をおこなった結果、指導介入群は体脂肪率の有意な低値と除脂肪量の有意な高値を示した。また、指導群において食事内容の変化および意識の変化を認めたことから、指導内容が理解された結果行動が変化し、体格の向上につながったことを認め報告した。(8頁) (海老久美子、中尾英美子、上村香久子、八木典子) 担当部分：主著者博士論文のため、研究全般の指導 (担当頁特定不可能)
30 大学生アスリートの食生活の実態について—居住環境の違いによる比較— 《査読付き》	共著	平成21年 8月	日本健康体力栄養学会誌 Vol. 14(1) pp. 11-19	高校生までは食生活を管理されていた大学生アスリートが不規則な食生活になっていく要因について検討を加え、大学生アスリートに対する有効な栄養教育、食事指導について考察した。(9頁) (福田典子、海老久美子、上村香久子、岡村浩嗣、八木典子) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)
31 全国大会出場高校生公式野球部員の体格、身体組成に対する栄養指導の影響について 《査読付き》	共著	平成21年 8月	日本健康体力栄養学会誌 Vol. 14(1) pp. 20-25	全国大会出場の高校公式野球部員の体格、食事調査を行い、栄養指導の有無と食意識、食事の摂取状況、体格について検討を加えた。この調査により、高校野球連盟に属している全国の高校野球児に対して食に関する意識の向上と栄養教育の効果をあげることを目的としたものである。(6頁) (海老久美子、上村香久子、福田典子、八木典子) 担当部分：研究指導と調査、分析の分担 (担当頁特定不可能)

32	大学生の硬式野球選手と陸上中長距離選手の食生活状況の比較 《査読付き》	共著	平成22年 4月	日本健康体力栄養学会誌 Vol. 14(2) pp. 56-61	競技種目の違いが食事に対する意識、知識、行動にどのように影響を及ぼすかについて検討を加えることにより、競技種目による食事指導の方法を検討した。(6頁) (福田典子、海老久美子、上村香久子、岡村浩嗣、八木典子) 担当部分：研究全般の指導と調査協力 (担当頁特定不可能)
(その他)					
1	Gel-chromatography of serum in magnesium or calcium deficient rats.	共著	昭和60年 7月	International Symposium on Magnesium	血漿中のMgの形態を検討した結果、たんぱく質とMgが弱く結合しており、この結合に食餌中のCaが大きく関与していることを報告した。 担当部分；主研究、研究全般指導 (Yagi N., Moruyama Y., Morioka M., Yasuda T., Itokawa Y.)
2	Gel-chromatography of intestinal mucosa of magnesium or calcium deficient rats.	共著	昭和60年 7月	International Symposium on Magnesium	腸でのMgの形態を知るため、腸粘膜を用いて研究を行った結果、MgおよびCaと強く結合するたんぱく質の存在を認め報告した。また、血漿と同様たんぱく質結合Mgに対する食餌中のCaの影響が大きいことも判明した。 担当部分；主研究、研究全般指導 (Yagi N., Moruyama Y., Morioka M., Itokawa Y.)
3	Effect of gender and exercise on aging in the senescence accelerated mouse (SAMP8//Ya).	共著	平成6年 3月	First International Conference on Senescence: The SAM Model.	雌雄の老化促進モデルマウスに対し強制的な運動負荷を行った場合、雌に比べ雄は運動の持続性に乏しく、老化状態も雌に比べて著しく進行することを報告した。 担当部分；主研究 (Yagi N., Yagi H.)
4	体育系クラブに属する大学生の食生活状況について	共著	平成15年 9月	第50回 日本栄養改善学会学術総会	体育系クラブに属する大学生の食生活を調査した結果、高校生まではしっかりと守られていた食生活が、朝食抜きになり、サプリメントに頼りがちになる傾向が認められた。基礎体力を十分につけて競技力の向上を図るためには、食生活の自己管理を十分行なえるような教育が必要であるとの結論を得た。担当部分：研究指導 (八木典子、福田典子、入江祐子)
5	体育系クラブに属する学生の食生活と疲労感について	共著	平成16年 9月	第51回 日本栄養改善学会学術総会	アメリカンフットボール、硬式テニス部、陸上中長距離部の男子選手について、食事の違いと疲労感の関連について検討した。朝食欠食が少なく、バランスの良い食事を心がけている者は野菜・果物の摂取が多く、疲労感も少ないが、食事バランスが悪く、体脂肪率が高くなると疲労感も増加するという結果を得た。担当部分：研究指導 (福田典子、八木典子)
7	高校1年生野球部員に対する栄養・食事指導効果の検討	共著	平成16年 9月	第51回 日本栄養改善学会学術総会	高校1年生の野球部員は、新入時から新チームになるまでの間に一定の期間があるため、十分な健康・栄養管理が行われないうと、体格、体力を低下させてしまいことが多い。そこで、この期間に食事指導を行った場合と、行なわなかった場合で体格、体力の比較を行い食事指導の効果について検討を加え、食事指導の有効性を証明した。 担当部分：全研究指導 (海老久美子、中尾芙美子、上村香久子、八木典子)

8	京都府和知町における高齢者の「食の自立」への取組み—プレシード・プロシードモデルを用いて—	共著	平成17年 9月	第52回 日本栄養改善学会学術総会	高齢化率の高い山村部である和知町においてアンケート調査とグループディスカッション等の結果を基にppモデルを用いて整理していく中で、地域高齢者のニーズ分析、QOLの把握が明確になり、保健・医療・福祉行政の協力が得られてきたことで、総合的な施策作りに繋がった。八木は、共同研究者（アンケート分析、研究の相互議論等に関与） （前田佳予子、松葉真、鞍田三貴、 <u>八木典子</u> 、仲津美希、前田圭禰）
9	全国大会出場高校野球選手における体組成の特徴と食生活の関連について	共著	平成17年 9月	第52回 日本栄養改善学会学術総会	高野連の依頼により行なった研究。全国高校野球出場選手の食生活と体組成の関連について検討した。食事摂取量と除脂肪量は、正の相関が認められ、食事摂取量の多い選手は除脂肪量が多く、除脂肪量が高いチームが、春、夏大会ともに1回戦、2回戦を勝ち抜いている結果を得た。担当部分：研究全体の指導、調査参加、分析分担（海老久美子、上村香久子、 <u>八木典子</u> ）
10	京都府北部における高齢者の食事の特徴について(第1報)	共著	平成18年 9月	第53回 日本栄養改善学会学術総会	高齢化の進む京都府北部京丹後市と京都市内の高齢者の食事調査結果を比較し、摂取食品の違いと生活環境の関連を分析した。結果、京丹後市では、市内都市型高齢者に比べて野菜や海藻、味噌汁の摂取が高かった。また、市内都市型に比べて同居率が高く、家族への食事依存度が高かったことから、過疎化の進行する地域における高齢者の食生活改善には、同居家族に対する教育、支援が必要であることが分かった。担当部分：研究全体の指導、調査、分析（山本亜衣、遠藤朝美、副田久美子、谷文子、 <u>八木典子</u> 、前田佳予子）
11	京都府北部における高齢者の食事の特徴について(第2報)	共著	平成18年 9月	第53回 日本栄養改善学会学術総会	過疎化の進行する京丹後市における高齢者の食事の作り手と食事内容について検討を加えた。作り手が嫁の場合は、高齢者に気を使ってか、高齢者の好む食材を比較的多く使い、インスタント食品は控える傾向であるが、高齢者側に立つと、自分の好みのメニューが提供される率は当然高齢者本人が調理するほうが多くなっている。高齢者に気を遣って食字づくりをしている嫁の負担は大きいことが推測された。担当部分：全体の指導、調査、分析（遠藤朝美、山本亜衣、副田久美子、谷文子、前田佳予子、 <u>八木典子</u> ）
12	高校ラグビー選手に対する食事・栄養指導と体格の関連について	共著	平成18年 9月	第53回 日本栄養改善学会学術総会	全国大会出場レベルの高校ラグビー選手に対し、食事指導の効果を評価した。ラグビーの競技特性から筋肉の増量と体脂肪の減量が重要である。食事介入を行った選手のうち、食事改善実践が良くできた選手は、除脂肪量を増加させることができたことから、食事指導の介入は、有効であることが証明できた。担当部分：全体の研究指導（上村香久子、海老久美子、 <u>八木典子</u> ）
13	体組成分析装置により算出される基礎代謝量と呼吸代謝測定装置による安静時代謝量の相関	共著	平成19年 9月	第54回 日本栄養改善学会学術総会	体組成分析装置（In Body 3.2）は、測定が簡便であることから、広範に利用されている。しかし、基礎代謝量の算出は独自の数値を用いて算出されている。そこで、持ち運びに便利な呼吸代謝測定装置（V02000）で測定される安静時代謝量とIn Body 3.2で測定される基礎代謝量との関連を検討し、相互の測定データの利用が可能であるかどうかを検討した。結果、全てのケースにおけるデータの互換は難しいが、一定の条件下では、データの互換は可能であることが判った。全体の研究指導、測定指導（福田典子、大森由絵、副田久美子、 <u>八木典子</u> ）

14	平成20年度から実施される企業健診（特定保健指導）時の栄養指導プログラム構築のための検討（第1報）	共著	平成21年 9月	第56回 日本栄養改善学会学術総会	特定健診に基づく特定保健指導を効果的に行うために、肥満と判定されないBMI<25段階からの指導効果を検討する。本報は、特定保健指導対象ではないが、前もって指導を開始するとより予防効果が上がると推測されるグループの抽出をBMIと身体計測値、生化学検査値を基に検討した。担当部分：研究指導（松葉真、八木典子）
15	平成20年度から実施される企業健診（特定保健指導）時の栄養指導プログラム構築のための検討（第2報）	共著	平成21年 9月	第56回 日本栄養改善学会学術総会	特定健診に基づく特定保健指導を効果的に行うために、対象者のQOLと健康状態との関連について検討を加えた。その結果、会社の環境においては、仕事への満足度、人間関係、部下へのサポート体制において健康度との関連が深い結果を得た。また、若い年齢よりも50歳代の方が活力、心の健康度合いは良好であり、若い層における健康支援が望まれると推測される。担当部分：研究指導（八木典子、松葉真）
16	特定保健指導時の栄養指導フォローアップの効果について	共著	平成23年 9月	第58回 日本栄養改善学会学術総会	2007年度より企業における特定健診と、その後の栄養改善指導の効果について検討を行なった。企業健診での健康課題として、「肥満」「高血圧」が多いことがわかった。したがって、これらのリスク低減を目的にポスターとチラシ配布を行なった。その結果、40%以上の者がポスター、チラシに示した意識すれば実践できる項目を実践し始めた。今後、ポスターやビラに関心を示さなかった50%の者に対してグループ学習等の指導プログラムを組む必要があることがわかった。担当部分：研究指導（松葉真、八木典子）
17	M社20～30代社員及び家族に対する外食と中食の摂り方の観点からみた食事指導について	共著	平成24年 9月	第59回 日本栄養改善学会学術総会	2007年度より特定健診と、その後の栄養改善指導を行っている企業からの依頼で、20～30代社員及び家族に対する外食と中食の摂り方の指導を行った。社員の勤務地が数箇所に点在していることや対象者が多いことから、ポスター、チラシによる指導とし、内容は「外食時の献立やスーパー・コンビニのお弁当を選ぶときのポイント」に関するものとした。結果、ポスターを見た者66%、内容を読んだ者34.5%、意識して購入しようと思った者50%であり、約半数には一定の効果を認めた。担当部分：研究指導（松葉真、八木典子）
18	加齢に伴う学習・記憶障害に及ぼす栄養の影響－老化促進モデルマウス(SAMP8)をもちいた基礎的研究－ 2,000,000円	共著	平成4年 3月	大阪ガスグループ福祉財団・研究調査報告集 Vol.5	大阪ガスグループ福祉財団の研究費（200万円）により行なった研究。老化促進モデルマウスを用い、抗酸化効果を有するα-トコフェロールを多量に摂取させた場合の生体内過酸化脂質の生成と学習・記憶障害の進行状態について検討を加えた。担当部分；主研究（八木、梅沢）
19	昭和63年度、平成元年度科学研究補助金 一般研究（C） 課題番号 63570247 2,100,000円	共著	平成2年 4月	科学研究費補助金報告書	母ラットのMg欠乏状態が仔ラットの成長におよぼす影響について 母親のMg欠乏状態が、胎児および乳児の健康状態に及ぼす影響について検討を加えた結果、若齢時のMg欠乏は、心筋の活動に大きく影響を及ぼすことが判明した。担当部分：主研究（八木、入野）
20	平成4年度 科学研究補助金 一般研究（C）	単著	平成5年 4月	科学研究費補助金報告書	母ラットの摂取ミネラル量の違いが仔ラットの成長に及ぼす影響について 研究全体：八木

21 平成7年度、平成8年度 科学研究費補助金 基盤研 究(C)(2) 課題番号07670415 2,300,000円	単著	平成9年 4月	科学研究費補助金報告 書	ストレスが老化に及ぼす影響について－老 化促進モデルマウスを用いた研究－ ストレス負荷により老化が進行するが、運 動による負荷よりも精神的な負荷の方が老 化が著しいことが判明した。 研究全体：八木						
22 平成9年度、平成10年度、 平成12年度 科学研究費補助金 基盤研 究(C)(2) 課題番号09670370 3,300,000円	単著	平成13年 4月	科学研究費補助金報告 書	老化に伴う学習・記憶障害に及ぼす脳中過 酸化脂質とミネラルの影響について 老化促進モデルマウスを用いて、老化に伴 う学習記憶障害の進行と脳中の過酸化脂質 の増加の関連を明らかにするとともに、抗 酸化に関連するミネラルの変動の影響を検 討した。 研究全体：八木						
23 平成9年度、平成10年度 エーザイ委託研究 2,000,000円	単著			SAMを用いた学習・記憶障害に対するα－ tocopherol及びtocotrienol-rich- fraction(TRF)投与の効果 研究全体：八木						
<p style="text-align: center;">上記記載以外に</p> <table style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="padding-right: 20px;">著者</td> <td style="text-align: center;">5件</td> </tr> <tr> <td style="padding-right: 20px;">学術論文</td> <td style="text-align: center;">26件</td> </tr> <tr> <td style="padding-right: 20px;">その他</td> <td style="text-align: center;">多数件</td> </tr> </table>					著者	5件	学術論文	26件	その他	多数件
著者	5件									
学術論文	26件									
その他	多数件									

